

幼児性の弱視と 言われた人は？

医師に「弱視」と診断された場合は、処方されたメガネをかけ始めることが必要です。

しかし、親の気持ちからすると「メガネをかけるに何とかしてあげたい」と思うものです。また、「弱視」とはどのような眼の状態のことなのか、わからない人もいます。

弱視とは、裸眼視力が0・3以下で、どんなによく見えるようにしたメガネをかけても0・4、乱視の入った弱視の場合は、乱視矯正を行っても、1・0以上の視力が出ない眼のことをいいます。

弱視は、大きく2つに分けることができます。1つは視覚伝導路に何らかの病的な異常があつて、回復が困難な「器質的弱視」です。

もう1つは、眼が物を見るときに本来の仕事をして忘れてしまっただけで、回復可能な状態にある

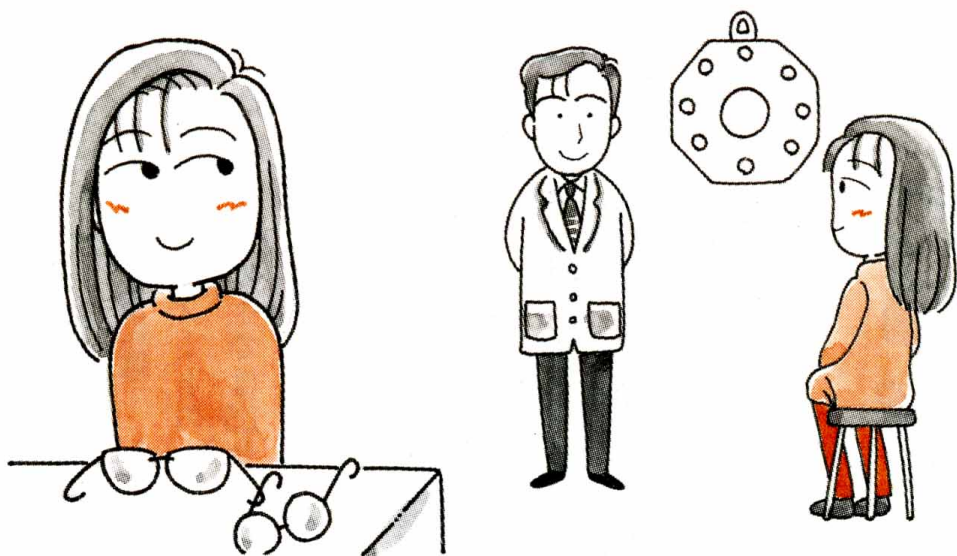
「機能的弱視」です。

人間はふつう生まれたときは遠視で、生後2〜3か月ごろの視力は0・02ぐらいといわれています。その後は、成長とともに物を見る学習をしながら視力も発達していきます。その発達の途中で、長期にわたって片眼だけに眼帯をかけたたりした場合、その眼が物を見ようとする努力を怠り、機能が低下することも考えられます。

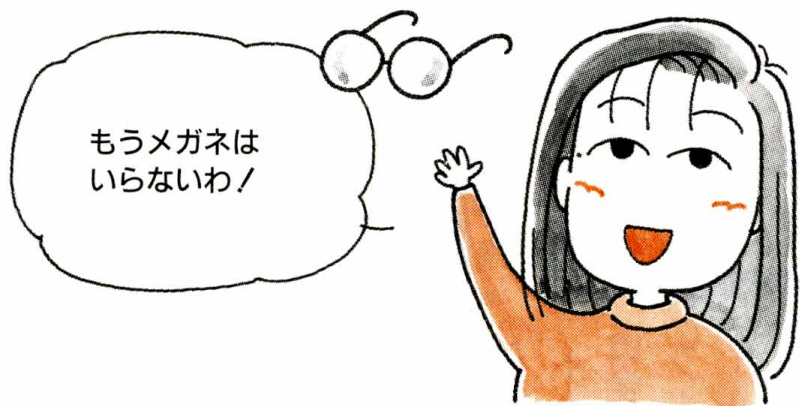
したがって、「幼児性の弱視」と診断されてメガネをかけるといふことは、視力の発育途中で何らかの原因で物を見る努力をしなくなった眼にとって、視力を回復させるために、第一に必要なことと言えます。

現在、当センターでは多くの子供たちが弱視訓練に励んでいます。本人の努力とご家庭の協力で、弱視が治り、メガネをはずした人もいます。弱視といわれメガネをかけなければならぬ状況になつても、決してあきらめず、視力の回復に努めてください。

弱視の人はメガネをかけて訓練する



毎日、1番よく見えるメガネをかけて訓練を行う



7歳前に遠視性弱視が治ると、メガネをはずせることが多い



「弱視」と診断されても、すぐにあきらめず、1番よく見えるメガネをかけて、訓練を行ってみましょう。発見が早ければ、メガネをはずすことも可能です